

# 好意的性差別意識と性役割意識との関連

## —パターナリズム / マターナリズム・ジェンダー差異・異性愛重視の 3要素に着目して—

吉岡真梨子  
(2017年1月5日受理)

### Benevolent Sexism and Gender-Role Consciousness —Focusing on: Paternalism/ Maternalism, Complementary Gender Differentiation and Heterosexual Intimacy—

Mariko YOSHIOKA

The purpose of the present study was to examine the relationship between benevolent sexism and gender-role consciousness. This study focused on the three sources of benevolent sexism: paternalism/maternalism, complementary gender differentiation, and heterosexual intimacy. Forty university students completed a questionnaire which consists of benevolent sexism (ASI: Ambivalent Sexism Inventory or AMI: Ambivalent toward Men Inventory) and gender-role consciousness (M-H-F Scale). The main results were as follows: (1) Masculinity promoted benevolent sexism in both of male and female; (2) There was no influence of gender-role consciousness on complementary gender differentiation of men nor maternalism of female; (3) However, I found that the reliability of the three sources of ASI or AMI by  $\alpha$  coefficients was low.

**Key words:** Benevolent Sexism, Gender-Role Consciousness

キーワード: 好意的性差別, 性役割意識

## 問題と目的

「男性は仕事、女性は家庭」という伝統的な性役割観は、近代以降、日本において根強く支持されてきた価値観である。このような考え方に対して、「賛成」「どちらかといえば賛成」を合わせると過半数を超えるという状況が、最近まで続いてきた。平成14年の世論調査では、全体で46.9%、女性で43.3%、男性で51.3%が「賛成」「どちらかといえば賛成」と回答しており、平成14年の中学生・高校生の意識調査においても、「女性は子どもが生まれたら子育てに専念し、仕事をすべきではない」に「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した中高生は24.0%存在し、伝統的な性役割観が継承されていることが示された。これらを鑑みると、意図の有無に関わらず、伝統的な性役割観に

もとづく性差別が生起している可能性がある。

Glick & Fiske (1996) は、両面価値的性差別理論において、非伝統的な女性に対する敵意的な態度だけでなく、伝統的な女性に対する好意的な態度（保護や理想化）も実は偏見や差別であると指摘している。そして、好意的性差別はパターナリズムとジェンダー差異、異性愛重視といった男性のもつ両面価値の3要素を内包していると仮定した。彼らは、これらの仮定をもとに Ambivalent Sexism Inventory (ASI) の尺度を作成し、性差別主義者は敵意的性差別と好意的性差別を時と場合によって使い分け、自己の行為を正当化するという仮説と ASI を用いた調査結果が一致することを明らかにした。

パターナリズムには、男性は女性よりも勢力を持つべきだという支配的温情主義とともに、保護的温情主

義がある。沼崎 (2012) によれば、保護的温情主義とは、男性が男性支配を正当化するために、勢力に関わる作動性を女性に付与せず高い地位を与えない見返りとして、男性は自分に依存する女性を保護し養うという義務を背負っていることを指す。例えば、ASI 日本語版では「女性は男性から大事にされ、守られなければならない」といった尺度項目がこれにあてはまる。

ジェンダー差異とは、男女の関係を相補的かつ支配一被支配の関係とし、男女双方に別々の社会的役割を与えることを指す (沼崎, 2012)。例えば、ASI 日本語版では「多くの女性は、ほとんどの男性が持っていないような清純な特性を持っている」といった尺度項目がこれにあてはまる。

異性愛重視とは、男女間の相補的な相互依存関係を指し、異性愛の男性は幸福や充実した人生を得るためには女性との関係が必要であるとする (沼崎, 2012)。例えば、ASI 日本語版では「男性は、女性なしでは完全とは言えない」といった尺度項目がこれにあてはまる。

また、Glick & Fiske (1999) では、男性に対する両面価値的性差別を測定する *Ambivalent toward Men Inventory* (AMI) が作成された。その際、上記の両面価値の3要素に対応して、パターンリズムにかわるマターナリズム、ジェンダー差異、異性愛重視の3要素が仮定されている。

マターナリズムとは、母性愛のことであり、AMI 日本語版では「男性は自分ひとりでは身のまわりの世話ができないので、女性は、家庭では男性の面倒を見てあげるべきである」といった尺度項目がこれにあてはまる。

上記のとおり、Glick & Fiske (1996) は、両面価値的性差別理論を展開するうえで、その中核として、好意的性差別には3要素が内包されていると仮定し、因子構造を検討している。これにより、好意的性差別の2次因子としてパターンリズム、ジェンダー差異、異性愛重視を見出された。しかしながら、彼らの研究では、両面価値的性差別理論の提案と、その尺度の開発という点に焦点があてられていたため、3要素の特徴や関係性については検討の余地がある。

日本における両面価値的性差別の先行研究では、性差別意識や偏見表出などに着目し、大学生を対象として送り手の意識や社会システム認知への影響などに焦点を当てているものが多くみられる (宇井・山本, 2001; 高林, 2007; 沼崎, 2012 など)。しかしながら、これらの先行研究では敵意的性差別と好意的性差別という両面価値に着目することにどまっており、それらが内包している3要素の検討にはいたっていない。

以上より、好意的性差別を扱ううえで、パターンリズムまたはマターナリズム、ジェンダー差異、異性愛重視の3要素に着目し、その関係性を明らかにすることは、理論的意義があるといえるだろう。

吉岡・井上 (2015, 2016) は、好意的性差別の観点から、送り手の伝統的性役割観を内包する言葉かけが受け手に及ぼす影響を検討している。その際、受け手の性役割意識を媒介変数、受け手の言葉かけに対する感情や受け手による送り手の意図解釈を従属変数として取りあげている。その結果、受け手の性役割意識のタイプによって、感情や意図解釈への影響が異なることが明らかになった。したがって、好意的性差別の影響には受け手の性役割意識が関連していると考えられる。このことから、送り手の好意的性差別意識においても、送り手自身の性役割意識と何らかの関連がみられると推測される。

従来、好意的性差別は、伝統的性役割観をもつ人による性差別態度であるという前提ゆえに、送り手、すなわち性差別行為者の性役割意識に着目した研究はなされてこなかったように見受けられる。しかしながら、性役割観と性役割意識は別の次元に存在するものであり、送り手の性役割意識と好意的性差別意識の関連を検討することは意義のあることだといえるだろう。

以上より、本研究では、好意的性差別意識に内包される3要素 (パターンリズムまたはマターナリズム、ジェンダー差異、異性愛重視) に着目し、身体的性別ごとに検討することで、性役割意識と好意的性差別意識との関連を明らかにする。

## 方法

**参加者** 大学生40名 (男性18名, 女性22名)。大幅な欠損がみられた女性1名は分析対象から除外し、39名 (男性18名, 女性21名) のデータを分析に用いた。  
**質問項目** 参加者の性役割意識を調査するために、M-H-F scale (伊藤, 1978) の Masculinity 項目の10項目、Humanity 項目の10項目、Femininity 項目の10項目の計30項目を用い、6件法で回答を求めた。教示文は「あなたにとって、次のような性質はどの程度重要だと思いますか? あなたの考えに一番近い番号に○をつけてください」とした。

参加者の好意的性差別意識を調査するために、身体的性別男性版の質問紙には *Ambivalent Sexism Inventory* (ASI) 日本語版 (宇井・山本, 2001) の好意的性差別因子に該当する11項目を用い、5件法で回答を求めた。なお、日本語の意味がわかりやすいように、一部の項目を改変した。Glick & Fiske (1996)

より、パターンリズム項目は4項目、ジェンダー差異項目は3項目、異性愛重視項目は4項目である。項目内容及び3要素の分類についてはTable 1に示した。身体的性別女性版の質問紙には Ambivalent toward Men Inventory (AMI) 日本語版(阪井, 2007)の好意的性差別因子に該当する10項目を用い、5件法で回答を求めた。Glick & Fiske (1999)より、マターナリズム項目は3項目、ジェンダー差異項目は3項目、異性愛重視項目は4項目である。項目内容及び3要素の分類についてはTable 2に示した。教示文は「現代社会における男女の役割や関係についてはいろいろな意見があります。以下のような意見にあなたは賛成ですか、反対ですか?あなたの考えに一番近い番号に○をつけてください。」とした。

**手続き** 講義の始めの10分で、参加者へ身体的性別に一致するよう質問紙を配布した。その後説明、回答および回収を行なった。

Table 1 ASI 日本語版尺度好意的性差別意識該当項目

項目番号	3要素分類	項目内容
1	異性愛重視	どのように立派なことを成し遂げようとも、女性から愛されないような男性は本当に完璧な人とは言えない。
2	パターンリズム	災害のときには、男性よりも女性の方が先に救助されるべきである。
3	異性愛重視	異性と恋愛をしない限り、人々は人生において本当に幸せだとは言えない。
4	ジェンダー差異	多くの女性は、ほとんどの男性が持っていないような清純な特性を持っている。
5	パターンリズム	女性は男性から大事にされ、守られなければならない。
6	異性愛重視	すべての男性は、深く敬愛する女性を持つべきである。
7	異性愛重視	男性は、女性なしでは完全とは言えない。
8	パターンリズム	よい女性は、相手の男性から大事に敬われるべきである。
9	ジェンダー差異	女性は男性に比べると、道徳に対する敏感さにすぐれている傾向がある。
10	パターンリズム	男性は、女性の生活を経済的に支えるために、喜んで自らの幸せを犠牲にするべきだ。
11	ジェンダー差異	女性は、男性に比べると、文化に対してより洗練された感性やよい趣味を持っている傾向がある。

Table 2 AMI 日本語版尺度好意的性差別意識該当項目

項目番号	3要素分類	項目内容
1	マターナリズム	たとえ夫婦共働きであっても、女性は家庭で男性の世話をするのが当然の務めである。
2	ジェンダー差異	緊急時のときに、男性は女性よりも取り乱しにくい。
3	異性愛重視	どんな女性でも、自分のことを大切にしてくれる男性を必要としている。
4	異性愛重視	女性は、男性と長期的で安定した関係を築かなければ、真にみたまされた人生を送ることはできない。
5	マターナリズム	男性が役に立つのは、主として女性に経済的安定をもたらすという点である。
6	異性愛重視	どんな女性でも、深く敬愛する男性がいるはずだ。
7	ジェンダー差異	男性は、自分の危険を省みることなく他人を助けようとするものだ。
8	異性愛重視	女性は、男性なしでは完全とは言えない。
9	ジェンダー差異	男性は、女性に比べて、リスクを伴う役目を進んで行かないがちだ。
10	マターナリズム	男性は自分ひとりでは身のまわりの世話ができないので、女性は、家庭では男性の面倒を見てあげるべきである。

## 結果と考察

### 信頼性の検討

M-H-F scaleの各因子の信頼性を確認するために、身体的性別男性版と身体的性別女性版それぞれにおいて、各尺度項目の内的一貫性を検討した。身体的性別男性版では、Masculinity因子の $\alpha$ 係数は.80、Humanity因子の $\alpha$ 係数は.76、Femininity因子の $\alpha$ 係数は.79の値を示し、信頼性のあるものであった。身体的性別女性版においても、Masculinity因子の $\alpha$ 係数は.70、Humanity因子の $\alpha$ 係数は.78、Femininity因子の $\alpha$ 係数は.78の値を示し、ほぼ信頼性のあるものであった。

Ambivalent Sexism Inventory (ASI) 日本語版の好意的性差別因子の信頼性を確認するために、各尺度項目の内的一貫性を検討した。その結果、パターンリズム因子の $\alpha$ 係数は.42、ジェンダー差異因子の $\alpha$ 係数は.55と低いが、異性愛重視因子の $\alpha$ 係数は.78の値を示した。

Ambivalent toward Men Inventory (AMI) 日本語版の好意的性差別因子の信頼性を確認するために、各尺度項目の内的一貫性を検討した。その結果、マターナリズム因子の $\alpha$ 係数は.32、ジェンダー差異因子の $\alpha$ 係数は.25、異性愛重視因子の $\alpha$ 係数は.09の値を示した。

以上より、M-H-F scaleにおける各因子の信頼性は確認されたが、ASI日本語版とAMI日本語版の好意的性差別因子における各因子の信頼性では、2次因子として抽出された因子であること（Glick & Fiske, 1996 ; Glick & Fiske, 1999）も影響して、ASIの異性愛重視因子を除いて、十分な値を確認できなかった。このことから、ASI日本語版とAMI日本語版において、3要素の観点を取り入れるには、今後尺度項目の検討も必要であると思われる。

本研究では、(1) Glick & Fiske (1996, 1999) の3要素分類にもとづいたパターンナリズム因子またはマターナリズム因子、ジェンダー差異因子、異性愛重視因子をそれぞれ基準変数とし、Masculinity 因子、Humanity 因子、Femininity 因子を説明変数とした重回帰分析と、(2) ASI日本語版の好意的性差別因子の各項目、AMI日本語版の好意的性差別因子の各項目をそれぞれ基準変数とし、Masculinity 因子、Humanity 因子、Femininity 因子を説明変数とした重回帰分析の2つの分析を行なう。なお、性役割意識の各因子と好意的性差別意識の各項目についての平均とSDについては、Table 3 と Table 4 に示したとおりである。

### (1) 3要素を基準変数とした重回帰分析

**身体的性別男性版における結果** 性役割意識が好意的性差別意識の2次因子である3要素にどのように影響を及ぼしているのかを検討するために、性役割意識を説明変数、パターンナリズム因子、ジェンダー差異因子、異性愛重視因子のそれぞれを基準変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行なった。

その結果、Figure 1 および Figure 2 のとおり、Masculinity 因子がパターンナリズム因子と異性愛重視因子それぞれに正の影響を、Humanity 因子がパターンナリズム因子と異性愛重視因子それぞれに負の影響を及ぼしていることが示された。なお、多重共線性につい

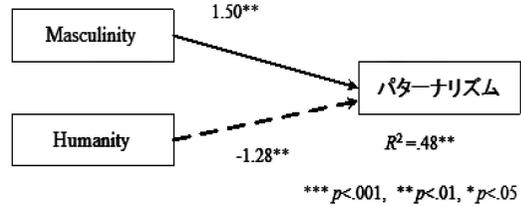


Figure 1 男性版におけるパターンナリズムの重回帰分析結果

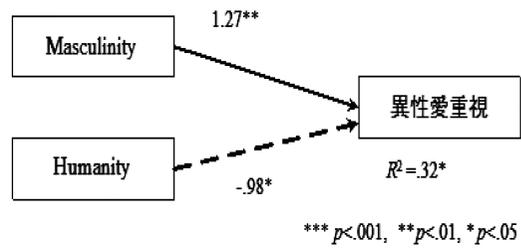


Figure 2 男性版における異性愛重視の重回帰分析結果

て確認するため、VIF 値を算出したところ、いずれも 6.0 未満であり、多重共線性は認められなかった。

重回帰分析の結果より、身体的性別が男性である場合、男性性の性役割意識が高いほど、好意的性差別意識に内包されているパターンナリズムと異性愛重視に関する態度や考え方が強いことが明らかになった。また、人間性の性役割意識が高いほど、好意的性差別意識に内包されているパターンナリズムと異性愛重視に関する態度や考え方が弱いことが明らかになった。身体的性別が男性で、Masculinity 得点が高い場合、性別と性役割意識が一致するため、伝統的な性役割について重要視していることが推測される。このことから、男性性は好意的性差別意識を高めていると考えられる。しかしながら、人間性、すなわち、性別に関わらず男女

Table 3 男性版における平均とSD (N=18)

	M	H	F	項目1	項目2	項目3	項目4	項目5	項目6	項目7	項目8	項目9	項目10	項目11
Mean	4.6	4.8	3.6	2.9	3.0	2.8	2.3	3.3	3.1	2.6	3.5	3.0	2.4	2.9
SD	.66	.57	.77	1.11	1.08	1.15	.77	1.08	1.11	1.20	.99	.69	1.04	.83

Table 4 女性版における平均とSD (N=21)

	M	H	F	項目1	項目2	項目3	項目4	項目5	項目6	項目7	項目8	項目9	項目10
Mean	4.4	4.4	3.5	2.0	2.7	3.6	2.4	2.2	2.9	2.4	2.0	2.9	2.1
SD	.49	.45	.69	.59	.73	.67	.87	.54	.54	.67	.67	.62	.65

ともに社会から期待される特性を重要だと考えていると、個人に目が向くため、たとえ男性性が高くても、好意的性差別意識は高まりにくい可能性があること示唆された。

他方で、ジェンダー差異に関する態度や考え方については、性役割意識では説明されなかった。このことから、3要素別に好意的性差別意識を検討する必要性が示された。

**身体的性別女性版における結果** 性役割意識が好意的性差別意識の2次因子である3要素にどのように影響を及ぼしているのかを検討するために、性役割意識を説明変数、マターナリズム因子、ジェンダー差異因子、異性愛重視因子のそれぞれを基準変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行なった。

その結果、Figure 3、Figure 4 のとおり、Masculinity 因子がジェンダー差異因子と異性愛重視因子それぞれに正の影響を、Femininity 因子がジェンダー差異因子に負の影響を及ぼしていることが示された。なお、多重共線性について確認するため、VIF 値を算出したところ、いずれも 3.0 未満であり、多重共線性は認められなかった。

このことから、身体的性別が女性である場合、男性性の性役割意識が高いほど、好意的性差別意識に内包されているジェンダー差異と異性愛重視に関する態度や考え方が強いことが明らかになった。また、女性性の性役割意識が高いほど、好意的性差別意識に内包されているジェンダー差異に関する態度や考え方が弱いことが明らかになった。マターナリズムに関する態度や考え方については、性役割意識では説明されなかった。

この結果は、身体的性別が男性である場合の結果と比べ、性役割意識と好意的性差別意識との関係が大きく異なっていることを示すものである。男性と同様の構造であると仮定すれば、身体的性別が女性で、Femininity 得点が高い場合、性別と性役割意識が一致しているため、伝統的な性役割を重要視し、好意的性差別意識が高いことが推測される。しかしながら、結果として女性性の高さは、かえって好意的性差別意識に内包されるジェンダー差異に関する態度や考え方を抑制していることが示された。そして、男性同様、男性性が高いことが好意的性差別意識を高めていることが明らかになった。

このことから、身体的性別が男性であれ女性であれ、好意的性差別意識の高さには、男性性が強く影響していると考えられる。このように、女性において、男性と異なった構造を示唆する結果が得られた理由については、本研究のデータだけでは明らかにすることが困難

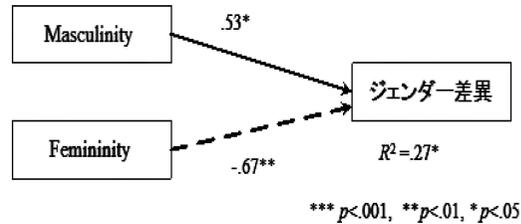


Figure 3 女性版におけるジェンダー差異の重回帰分析結果

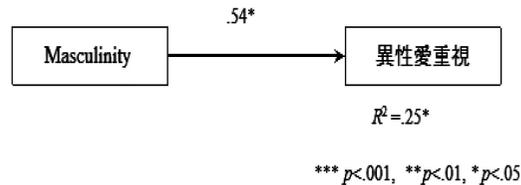


Figure 4 女性版における異性愛重視の重回帰分析結果

難であるが、Figure 1 および Figure 2 に示した男性版における重回帰モデルに比べ、Figure 3 および Figure 4 に示した女性版における重回帰モデルは、決定係数  $R^2$  の値が低い傾向にある。よって、男性よりも、女性の好意的性差別意識は、性役割意識以外の変数による影響を強く受けていることも考えられる。今後他の要因についても検討していく必要があるだろう。

(2) 好意的性差別意識を基準変数とした重回帰分析

**身体的性別男性版における結果** 性役割意識が好意的性差別意識にどのように影響を及ぼしているのかを検討するために、性役割意識を説明変数、ASI 日本語版の好意的性差別因子に該当する 11 項目を基準変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行なった。その結果を Table 5 に示す。

Table 5 に示した結果の中で、決定係数である  $R^2$  の値が .10 以上の項目について以下に詳しく記述する。異性愛重視に分類される項目 6 には Femininity 因子が、同じく異性愛重視に分類される項目 7 には、Masculinity 因子が正の影響を及ぼしていた。パターンリズムに分類される項目 8 には、Masculinity 因子が正の影響を、Humanity 因子が負の影響を及ぼしていた。また、パターンリズムに分類される項目 10 と、ジェンダー差異に分類される項目 11 には、Femininity 因子が正の影響を及ぼしていることが示された。なお、多重共線性について確認するため、VIF 値を算出したところ、いずれも 6.0 未満であり、多重共線性は認められなかった。

結果より、項目ごとに分析を行なうと、(1) の男性版で 3 要素ごとに分析を行なった際にはみられなかった Femininity 因子による影響が 5 つの項目において示

Table 5 男性版における項目ごとの重回帰分析結果

	基準変数								
	項目1	項目2	項目3	項目5	項目6	項目7	項目8	項目10	項目11
Masculinity	.38	—	—	.35	—	.39	1.25*	—	—
説明変数 Humanity	—	—	—	—	—	—	-1.08	—	—
Femininity	—	-.36	.35	—	.47*	—	—	.63**	.63**
$R^2$	.09	.08	.07	.07	.18*	.10	.20 <sup>+</sup>	.36**	.36**

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , <sup>+</sup> $p < .10$ 

\*項目4, 項目9については説明されなかったため, 省略した。

された。 $R^2$ の値が.10以上に限れば, 3つの項目において正の影響を示している。身体的性別が男性のデータにおいてみられたこの結果は, 性別と性役割意識が一致しているときに, 伝統的な性役割を重要視し, 好意的性差別意識が高くなるという仮説に当てはまらない。むしろ, 性別と性役割意識が一致していない場合に, すなわち女性性が高い場合に好意的性差別意識が高くなっている。このことから, 性役割意識だけではなく, 性役割観についても調査し, 組み合わせて検討する必要が示された。

また, 4つの項目において, Masculinity因子が正の影響を及ぼしていることが確認されたが, 先に述べたようにFemininity因子による正の影響も4つの項目で確認された。このことから, 3要素を基準変数とした重回帰分析の結果にもとづき考察したような身体的性別が男性であれ女性であれ, 好意的性差別意識の高さには, 男性性が強く影響しているという論が, 普遍的には言えないことが示された。これらの結果すべてを統合して考察することは, 本研究のデータのみでは非常に困難である。しかし, このような結果がみられた可能性の一つとして, 現代の性役割意識の変化があげられるだろう。ジェンダー関連の先行研究において, よく用いられるM-H-F scaleではあるが, 1978年に作成されており, 作成されてから30年以上が経過している。ゆえに, 現代の性役割意識を測定するには適していない可能性がある。したがって, 性役割意識を測定する尺度について検討が必要であるといえるだろう。

**身体的性別女性版における結果** 性役割意識が好意的性差別意識にどのように影響を及ぼしているのかを検討するために, 性役割意識を説明変数, AMI日本語版の好意的性差別因子に該当する10項目を基準変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行なった。その結果をTable 6に示す。

Table 6に示した結果の中で, 決定係数 $R^2$ の値が.10以上の項目について以下に詳しく記述する。ジェンダー差異に分類される項目2には, Humanity因子が正の影響を, Femininity因子が負の影響を及ぼしていた。マターナリズムに分類される項目5には, Femininity因子が正の影響を, 異性愛重視に分類される項目6には, Humanity因子が正の影響を及ぼしていた。また, ジェンダー差異に分類される項目7と, 異性愛重視に分類される項目8には, Masculinity因子が正の影響を, Humanity因子が負の影響を及ぼしていることが示された。なお, 多重共線性について確認するため, VIF値を算出したところ, いずれも3.0未満であり, 多重共線性は認められなかった。

このように項目ごとに分析を行なうと, 3要素を基準変数とした重回帰分析の女性版で3要素ごとに分析を行なった際にはみられなかったHumanity因子による影響が5つの項目において示された。そのうち, 3つの項目で正の影響がみられた。重回帰分析の男性版の結果についての考察で, 性別に関わらず男女ともに社会から期待される特性を重要だと考えている人間性が高いと, 個人に目が向くため, 好意的性差別意識を抑制すると考察したが, この結果はその考察に反する

Table 6 女性版における項目ごとの重回帰分析結果

	基準変数						
	項目2	項目4	項目5	項目6	項目7	項目8	項目9
Masculinity	—	—	—	—	1.13***	.65*	—
説明変数 Humanity	.45 <sup>+</sup>	.33	—	.44*	-1.03***	-.40	—
Femininity	-.66*	—	.38 <sup>+</sup>	—	—	—	-.34
$R^2$	.20 <sup>+</sup>	.06	.10 <sup>+</sup>	.15*	.65***	.12	.07

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , <sup>+</sup> $p < .10$ 

\*項目1, 項目3, 項目10については説明されなかったため, 省略した。

ものである。抑制するはずの人間性が逆に好意的性差別意識を高めている原因の一つとして、先に述べた性役割意識の変化という M-H-F scale に関する課題が考えられる。また、この結果は、女性版でしか確認されていないことから、女性の性役割意識の在り方に原因がある可能性も考えられる。伊藤 (1978) の研究では、「男性は男性役割を積極的に受容しているのに対し、女性は女性役割を否定的にしか受容し得ず、それに代わるものとして Humanity が位置付けられている」という結果が示されており、約 20 年後の後藤・廣岡 (2003) による M-H-F scale を用いた性役割に対する認知の検討でも、伊藤 (1978) の結果と合致する結果が得られている。このことから、女性は女性役割の代わりとして人間性を捉えており、その認知による影響が本研究の結果にも表れた可能性があるだろう。

## まとめ

本研究は、好意的性差別意識に内包される 3 要素 (パターナリズムまたはマターナリズム, ジェンダー差異, 異性愛重視) に着目し、身体的性別ごとに検討することで、性役割意識と好意的性差別意識との関連を明らかにすることを目的としていた。

結果として、3 要素ごとに性役割意識の影響の仕方が異なっていることが明らかになった。しかしながら、3 要素に分類する際、Glick & Fiske (1996, 1999) にもとづいて分類を行なったが、各要素の信頼性が十分でなく、今後 3 要素の観点から日本語版尺度の構成を検討していく必要性が示された。

また、身体的性別によっても、影響の仕方が異なっていることが明らかになった。特に、3 要素を基準変数とした重回帰分析では、身体的性別が女性の場合に、予想に反して男性性の高さが正の影響を及ぼしていた。各項目を基準変数とした重回帰分析では、身体的性別が男性の場合に、予想に反していくつかの項目で、女性性の高さが正の影響を及ぼしていた。このことから、性役割意識が身体的性別と一致していることが、好意的性差別意識が高めているとは一概にはいえないことが明らかになった。他方で、身体的性別に関わらず、男性性は好意的性差別意識を高めやすいことが示唆された。これらの結果をより詳しく検討するた

めには、性役割意識だけではなく、どのような性役割観をもっているのかなど、他の要因についても扱っていく必要があるだろう。

## 引用文献

- Glick, P., & Fiske, S. T. 1996 The Ambivalent Sexism Inventory: Differentiating Hostile and Benevolent Sexism *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 491-512.
- Glick, P., & Fiske, S. T. 1999 The Ambivalent toward Men Inventory: Differentiating hostile and benevolent beliefs about men *Psychology of Women Quarterly*, 23, 519-536.
- 後藤淳子・廣岡秀一 2003 大学生における性役割特性語認知と性役割態度の変化 三重大学教育学部研究紀要 教育科学, 54, 145-158.
- 伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, 26, 1-11.
- 沼崎誠 2012 ジェンダー・ステレオタイプと性役割的偏見の再生産に関わる社会的認知研究 平成 19 年度～平成 21 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 研究成果報告書.
- 恩賜財団母子愛育会日本子ども家庭総合研究所 2004 日本子ども資料年鑑 KTC 中央出版, 18-85.
- 阪井俊文 2007 セクシズムと恋愛特性の関連性の検討 心理学研究, 78, 390-397.
- 高林久美子 2007 自己への脅威が女性に対する偏見に及ぼす効果: 両面価値的性差別理論からの検討 *社会心理学研究*, 23 (2), 119-129.
- 宇井美代子・山本真理子 2001 Ambivalent Sexism Inventory (ASI) 日本語版の信頼性と妥当性の検討 日本社会心理学会第 42 回大会発表論文集, 300-301.
- 吉岡真梨子・井上弥 2015 性役割意識は言葉かけの捉え方に影響するか—好意的性差別の観点から— *中国四国心理学会第 71 回大会発表論文集*, 47.
- 吉岡真梨子・井上弥 2016 送り手の伝統的性役割観を内包する言葉かけが受け手に与える影響 広島大学大学院博士課程前期修士学位論文.